福岡大空襲の夜

福岡市西区　　井上　典子

思い起せば昭和２０年６月１９日の夜のことでした。私は１５才、白鉢巻を、きりりとしめたモンペ姿の勤労学徒でした。母と兄の家族と一緒に平尾の高台の赤い屋根の家に住んで居りました。兄は学校の教師で、私は毎日、特攻機を造る工場へ通っておりました。私の学校は、伝統あるミッションスクールで、良家のお嬢様が多く、つたのからまる校舎、クロバーの生い茂る校庭で勉学にいそしんでおりましたが、急に工場で一般の工員さんと一緒に働かねばならず、ペンを捨て、ハンマーを握って塗料の匂いやガンガンする騒音の中で、暫らくは慣れませんでした。食糧物資も無く、おべんとうも少しの米飯に大豆やいもを混ぜ、そのべんとうを学友が命から二番目に大事と言って頭の上に乗せてるのが、今でも忘れられません。

作業が終って、真黒な手を洗うのに石けんも無く、泥か土の様なものを固めたもので洗っていました。時々干しバナナが配られましたが、小さくなって黒っぽいものでした。

現在では想像もつかないでしょう！今の若い人達は……。こういう時代を頑張って乗り越えて来たのですよ。

さて、６月１９日の夜のことでした。いつ警報が出るかわからないので、着のみ着のまま二階に寝ておりますと、例のごとくＢ２９のお出ましです。玄関に出ると、５才の甥と姪が、ふるえて立っておりました。外に出て空を見ると、探照灯に照らされた敵機が十文字の中に捕えられてるが、なかなか打ち落とされません。急いで防空壕に走ってる中、下の段にころげ落ちて、やっと母達と壕に入ることが出来ました。

平尾駅の方をふと見ると、大きなかごから火の玉がバラバラと散らばって落ちるような光景が今でも眼底に焼きついております。

母が、「もし壕の入口に焼夷弾が落ちたらどうしよう」と言ってるうちに、目の前の松の木に焼夷弾が落ちて、引っかかりブスブス燃え出しました。近所にお寺があり、兵隊の宿舎となっており「兵隊さんがいるから安心ね」と言ってたところ、そのお寺が燃え上がり、いつの間にか一人もいなくなって、どこへ行ったかわかりませんでした。

やっと警報が解除になって、安全な方へと逃げようとすると、逆に逃げまどう人が大勢来るし、道ばたは、焼夷弾がゴロゴロ、タケノコのように突きささっておりました。

学校警備から兄が飛んで帰って来るなり「皆無事かっ！！　けがは無いか！！」との声、今も忘れません。家族の事がどんなに心配だったでしょう。

台所に焼夷弾が深く突きささり、やっと消し止め、兄嫁が、いつもこの土間に腰かけていた位置だったと言ったので、ゾーッとしました。

消火の水で二階から滝の様に水が流れ落ちて硫黄の匂いが立ち込め、焼夷弾は六角形の筒状をしておりました。家族全員で消し止めましたが、地獄の様な一夜でした。

本当に、あの夜の福岡の空は一面に真赤な色をしておりました。翌日のベランダから見渡せばあたり一面の焼野ケ原の無残な光景でした。

九州一の大都会として、めざましい発展をとげた現在の大福岡市となって、想像もつかないことでしょう。

実際に体験し、はっきりと現在でも思い出され、私達が語り部です。絶対に戦争は、あってならないのです。次の時代の平和を強く願ってペンを置きます。